



駅前～

あんどん

# 行灯が点灯

点灯時間  
毎日18:00  
～22:00



「あいこうか」の市民憲章が描かれた巨大行灯

## 子育てで仲間づくり

～キッズフェスタ2006in甲賀～



子どもたちとの遊びを通して  
子育ての楽しさを学ぶ参加者

かふか生涯学習館周辺で子育て中のお父さん、お母さんが参加し「キッズフェスタ2006in甲賀」が行われました。

このフェスタは子育てをしている仲間と気軽に出会い、日頃の悩みや思いを話し合えるとあって市内からたくさんの親子づれで賑わいました。

会場内には「手作りおもちゃ広場」「おもしろ科学遊び」「おもちゃライブラリー」などのコーナー、また各子育て支援センターの活動を紹介する展示コーナーなどがあり、参加された方々は、子育ての新たな楽しさを発見された様子でした。

子育ては一人で悩まず、家族・地域、また同じ仲間どうして困ったことなどを話し合いながら進めていくことが大切です。甲賀市の未来を担う子どもたちが安心して生活できるように子育て支援の取り組みは大切だと感じた一日でした。

## 戦後60年 忘れてはいけないもの

甲賀町櫛野区で文化会

2月5日(日)午後、櫛野区憩いの家で文化部主催により「いちの寄席と戦後60年をふりかえる」と題した文化会が開催されました。旭堂南湖氏の講談や立命館大学生の落語などの寄席、佐藤秀秋氏のオカリナ演奏に続き櫛野の戦争体験者による体験談が熱く語られ、和やかな雰囲気の中にも忘れてはならないものがあることに気づく機会となりました。



参加者で賑わう「櫛野寄席」

～地球市民セミナー～

## 多文化共生ではなく 新しい文化の創造を

碧水ホールで市内在住の外国籍住民が参加し、お互いの習慣や文化の違いを理解しあう「地球市民セミナー」が行われました。  
現在甲賀市には2900人もの外国籍市民の方がおられ、その中でも水口にはその約8割にあたる2300人が居住されています。同じ市民として生活していく上では教育、医療などの様々な課題が出てきます。そういった課題を解決するためにはお互いの文化の違いを認め合い、共に生活していく必要があります。  
セミナーの中では「今後の国際化には多文化共生ではなく、新しい文化を創造するという気持ちが大切ではないでしょうか。」といった意見が出ました。  
「制度・言葉・心」の3つの壁を少しでも取り除けるよう私たちみんなでもより良い甲賀市を創っていきましょう。



参加者からは様々な課題や解決に向けた意見が出ました。



第1回 こうかファミリーコンサート

あふれる愛に・・・

～JR甲南

「市民憲章」の



サウンド オブ ミュージック

子どもたちもすばらしい歌声を披露されました。

水口文化芸術会館で手作りのコンサート「第1回こうかファミリーコンサート」が行われました。これは旧水口町の時に「みなくちファミリーコンサート」の名称で第10回まで行われてきたもので、甲賀市としての出発を機に名称を変え新たにスタートされました。舞台上には市内外から総勢200名もの有志が集まり、これまでの厳しい練習を乗り越え、本番では会場から拍手が起るほど誰もがすばらしい演技や歌を披露していました。各メンバーの今後のご活躍に期待しています。

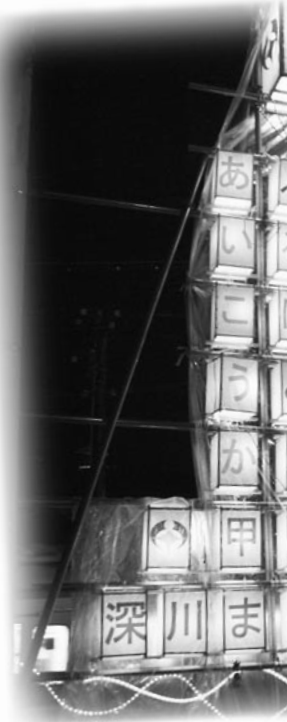
JR甲南駅前に甲賀市市民憲章の巨大行灯が点灯されました。

この行灯は甲賀市市民憲章の制定を記念し、深川区まちづくり委員会が中心となり同区のまちづくり事業の一環として、この憲章の理念である「あい こうか」を一人でも多くの方に知ってもらおうという思いで制作されたものです。

甲賀市民のまちづくりの指針となる「甲賀市市民憲章」。憲章のそれぞれの頭文字を続けて読むと「あい こうか」という言葉になります。

この憲章を策定された委員の方々の言葉をお借りしますが、皆さん一人ひとりの中に生きていく憲章であることを願っています。

市民の想いがたくさん詰まった行灯を皆さんも一度ご覧ください。



貴生川小学校児童が

甲賀市デイサービスセンター訪問

◎寄稿者 まちかど特派員 杉山 祐子 (水口町)



子どもたちと一緒に遊ぶ利用者

「景品の折り紙です。」と恥ずかしそうに差し出す小学生。目を細めて受け取る利用者の方々。水口町宇川にある甲賀市デイサービスセンターでの一場面です。

貴生川小学校では、介護福祉の体験学習と、命の大切さについて考えるきっかけになれば、と数年前から同センターとの交流会を実施しています。「3年生という学年は人を大切にする心やいたわる気持ちを上手に表現できる、ちょうどいい年齢ですね。」と、職員の宮治さん。4年生を目前にした頼もしい姿を見守りながらそう話されました。

自己紹介の後、サポーターの職員さんも加わって、交流会が始まりました。子どもたちが用意したゲームは多種多様。すごろく、新聞破り、玉入れ、糸電話……。どの班も、おじいさんおばあさんと一緒に楽しむために何回も話し合いをして、工夫した、との

こと。「座ってもできるように、釣り竿の長さを考えました。」というグループもありました。

大正元年生まれの利用者・黄瀬さんは「週2回来ていますが、このように多くの人と接するので元気になります。」と喜んでおられました。

ゲームの後はおやつタイム。「施設で働く人も含めた、いろんな人と関わることで、思いやる心を学んでくれたら」という先生方の思いが伝わったのか、子どもたちが自主的におしぼりやお茶を配る姿も見られました。

「何が一番楽しかった？」と質問した男の子に「あんたらが来てくれたことが一番嬉しかった。」と答えた利用者の女性。「おじいちゃん、また来るわ。」と約束して帰る女の子。「お礼に歌います。」の声に、みんなで合唱となったひとコマもありどの笑顔も輝いていました。

核家族化が進み、祖父母や曾祖父母と暮らす児童はクラスの約3分の1だそうです。以前は当たり前だった異世代間の交流が、市のあちこちで、もっと盛んに、もっと普通に行われればいいな、と強く思いました。